

客降建碑十周年

亡峰友に予むけて

思故友新

情多混完

表紙題字について

これは有名の句、論語の為政篇にある。孔子のことば原文は子曰、温故而知新可以為師矣であるが、温故知新のみでは、その主意を誤り易いので極めて簡単に解説する。

サテ温故とは何か、温の字は漢の鄭玄、古より温は尋と同也尋は煇で「アタタメル」と読む、又賈達の注に温は尋也で「タツネル」と読むばかりでなく研究の意味がある。その他温の字は温和温厚温情等の熟語の中に親愛の情、大切にする意がある。故は古と同音で旧知を言ふ、获生徂来は故とは國の故（曲礼）天下の故（易繫辭）凡そ先世の伝ふるものは皆これを故と言ふ、「先世の伝ふる所は我が学ぶ所と云っている」されば先祖の遺産であれ事業であれ訓話であれ大切に継承、凡てを亡ぼさぬよう盛んに研究すること、それが温故である。次に知新とは何であるか、知は識と區別されて覚ゆる意味がある。

新は旧の反、之れから為す即ち更作の意であるこれで温故知新の解釋を終る。

ところで論語の本文には、温故と知新の間に而がある。この一字が大切な役目（温故に入念しかる後）を意味する文字の使い方である。孔子の時代國家混乱「はてし」なかつた。この乱争の世を治め、民を救済する道は学ぶにある。そこで孔子は弟子達を前にして・・お前達は世の指導者となるのじや、指導者となるには温故に練達し、これに基づいて理をきわめ道を拓く事それが温故而知新である。両句を兼た立派な資格を備えて、世の指導者となるよう懇々と教えられ、萬世の為に太平を悲願しての聖賢孔子のことばであることを忘れてはならない。

◎ 題字とした意義そこにあるを：：：：：

亡親友（誓誠信士） 住野菊太郎氏の靈に捧ぐ

○ア、住野さん今日は、蜂の神靈に感謝の牌を建ててから満十周年になりましたので恭しく祭典を行いその靈魂を慰め感謝を新たに致しますと共に、住野さんと私との永い間の交友、在りし日の思い出を語り住野さんを悦ばせ慰めたいのです。

○住野さんと知り合ったのは大正十二年の春でしたね、私が岐阜を訪れる途中、汽車の窓から蜂箱を見つけたので、汽車が止ると直ぐに下車し、「このあたりに蜂飼う人がいる筈」と尋ね訪づれ、初対面してから、「何んと言う駄だったろうか」と問うたら押切でした。慌てもものと思われながらも私は住野さんに懇意を求めたい為、自己紹介と蜜蜂の行動に感激した話をする、初めはあまり喋べらなかった住野さんも笑顔になって忽ち蜂談に花が咲いた。

○実は自分は広島市に生まれ、故あって十九のとき家を飛び出し、貨物船でアメリカに付いたが、言葉が通じないで手真似足まねして職を求め、凡ゆる重労働を重ねた末に、某農園に雇われた。処がその農園に蜜蜂が沢山飼ってあり養蜂部長がいる。そこで住野さんは養蜂助手となって三ヶ年の研究を為し、自信を得たので「帰国して故郷に錦を飾りたいから」と、渡米以来の労金を蜜蜂に換い度いと申し出で、園長の快諾で数十箱の分譲をうけ、広島は暑いからと北海道の岩見沢に帰国された……。

○岩見沢の原野は百花 乱である。住野さんは欣喜雀躍採蜜に分封に眼まぐるしいほどの活動を続けついに大成功した。その喜びは忘れられなかったという。処が冬になったら積雪期間が長い為に蜂は凍死餓死で殆んど全滅、生き残りが三〇四分の一で、落胆しちまったが、五月から夏になると、忽ち蜂の増殖と、限らない集蜜で大成績、雀躍の喜びを為したが、又冬が近づく。今年こそと完全防寒設備を施したが、又々半数の死滅群を出し、生き残り群を、又繁殖して又冬を迎える。斯くて一喜一憂、繰り返し苦楽を満喫し、遂に内地の暖かい処を選び、小田原と押切に移動したと語られた。

○住野さんと別れてから車中の私は良い蜂友を求め得た無限の悦を感じた。殊に養蜂の先進国アメリカで研究された由。サテサテ自分は明治四十一年の春（十八才）愛玩的に一箱買求てから指折数えれば十六年になり埼玉県内の養蜂王に甘んじているは井の中の蛙だ。住野さんこそ私の否日本の養蜂先覚者であると思ひ、以来時々通信し、親交が続いた。

○大正十三年私が静岡県 of 柑橘花に見惚れて大志を抱き、埼玉から始めて県外転飼と、新たに百郡を買入え、庵原村天野亨氏に住居する。住野さんは清水さんが庵原に来たからには乃公も庵原に行くと、間もなく押切から移動した。互に行ったり来たりしてそのうちに静岡県内の蜂友は次々と知り合いとなった。当時養蜂の流行し始めて、何れも農家の副業で少数の蜂箱持主であったから、私が転飼した噂を聞いて訪づれる者も多数とな

った。私も初対面から親兄弟同様に語り親しみ合っていると、或る日門外で、家人と「こちらに大きな蜂屋さんが来たそうだが蜂屋さんは居たでしょうか」の声、之れを耳にした私は愕然としちまう。何んだ柿でもないのに八屋とは失礼なと思ひながら、近寄る者を笑顔で迎えた。見ればポロ自転車でポロ股引で地下タビ、腐れた麦藁帽子に覆面布、之れだから誰となしに 屋さんの名称づけられるも無理からぬ事と諦らめて苦笑。

註

自分は常に白衣を着て蜂場出廻り、故郷では先生先生と初心者からは敬愛されていた。養蜂は立派な高尚の専業、而も蜜蜂の行動を観察し体得して、己が修養となし、身は小なりとも、心は天晴れ日本の実業養蜂家であるの自負心と、且つは産業立国の良民とならむ心構えが青春に漲って居たから、蜂屋さんという初めての声は心臓にこたえた。住野さんも大笑い。

○大正十五年の春雨の日、私の蜂場天野宅に、住野さんが御夫婦して見えた。「サアお上りなさい」と款待すると、住野さん夫妻が揃っておすわりし、「今日は折入ってお願いしたい事がある」と申される。私が「何の事ですか」と問うと、住野さんが、「清水さんと知り合ってから最早三年半四年になります。蜂飼う者は流浪の旅で、清水さんも故郷は埼玉、私も広島、お互に淋しい。清水さんと私とは丁度親と子ほど年齢が違うから、こんな爺でも仕事上の親と思って、御面倒見て頂けませんでしょうか」と申され、私は喜び溢れ、「私から住野さんをお願いしたい事です」と返答するや、忽ちに住野夫妻が悦んで布呂敷包を開いて一升瓶とお重箱の蓋を取る。茲に養蜂業上の親子盃を取替

はしながら、「何の肉ですか」とお重のテリ焼を奥さんに問うや「食用蛙」と言われてビックリ眼をすると、「清水さん美味だよ」と勧められ、仕方なしに眼を閉じながら片股を食べた。軟かであったが気が悪くて、大笑しながら、「住野さんはアメリカ生活したからハイカラ紳士だよ。平素も洋服だし」などと冗談をいいながら楽しい一時をすごした。住野夫妻は、私と親子喫りの盃を取り交わし悦んで帰られた。

○その後住野氏が、「清水さん、村田自動車屋が空気の吠っている自動車を買った噂。行って見よう」と誘いに来られたので、直ちに行ったところゴム輪の太いのに驚いた。今はシングルと言って自動車は皆荷馬車より少し太いゴム輪で、蜜蜂移動にも苦勞したが、「これなら蜂が嚙良からう。住野さん、夏は富士山に登ろう」、と行って早速村田さんに運搬の依頼予約をした。

○聽てみかん花も終わった富士山麓に二人が転地となる。共同して荷造り。蜂の巢門を閉じて積込み、運転手が繩を×にかけたのを大いに賞め替えて、運転手の脇に二人が乗り込んだ。夜の九時に庵原を出発、岳麓につくと、東は白らむ須走り辺に掛るや、急坂左右に曲折聽て夜が明け放れるとき、眼前の車頭は黒塗りで丸い。その丸い頭を左右に振りながら、モウーンウーンと生ける怪獣に乗ったような心地。籠坂峠で一吋一腹と、一同が一と休。住野さん、冷しいどころか寒い、富士の高嶺は手が届くほど青空に近い、旭光は山中湖面の浪に映ずる。何たる愉快の極みでしたね。再び乗車なして、忍野村の日

活フィルム製作所があったので、其処に蜂箱を並べ、部落を訪づれ、村長さん宅に宿る。住野さんの蜂も引続いて私の近くに移住し、互に往来。その翌年も翌年もと、遂に三ヶ年、岳麓転飼をしたが、収蜜も覚束なく、只蜂群を維持する程度で経営難が続いた。住野氏は「金があったら、北海道に夏は転飼したい」と時々私に告げるのであった。

○北海道は遠い。殊に連絡船の積換や、みつ蜂の死滅が心配だから成るべく本州内で経営したいが岳麓に萩はあるまいか」と吉田口に居た自分は土地の人に聞うや。上井出には沢山あると聞いたので、翌朝自転車で山麓北廻りを企て、河口湖畔の芝道を辿ると、御殿庭と言う処についた。流石に名称通り 約一里の間 千古の老松が、僅か一丈位しか伸びられず、常に霧に包まれている為、雲足が各枝から垂れ下っている。地面は黄色、薄緑、さまざまの苔が、岩石を覆うて、其美観は、筆舌では現わせない。このような大自然の美を誰れも知らないのかと思っていると、人の寄り集まる時もあると見えて、森永キャラメルの腰かけが点々と散在している。ここで休みたいが、先が未知の旅、精進湖までは泊る所がないと聞いて居るので、急ぎたいが、又川があり、水はないから自転車を担ぎて崖をよじ上り、平らかになると又凹になる道跡とでも言うべき人間の通った足跡を辿っている中に夕暗に包まれ、漸く精進湖についた。ホテルへ行き室に入ると、直ぐ茶代として金一円をあげた。湯に入ったら、「お室を換えました」と上々の室に案内された。 註 当時宿泊料は八十銭から一円二十銭が相場であった。

○夕食後主人を呼んで、「上井出なら萩が在るそうだが、これから明朝出でて夕方までに着くか」ときいたら、「着く亭はつきますが自転車で乗れると思うのは大間違いに担ぐものと思つて下さい。それにしても知らぬ山路をお一人は危ないし、茨や蔦も切らなくては通れないから、良かったら若者を付けましよう」と言うので、これ幸と頼んだ翌朝若者が腰に「ナタ」を挟んで一緒に出達、茨蔦を切り開いて、元巢湖についた。若者の説明で、神代の丸木舟が湖の底から発見され、いま丘に上げ保存されてあるのを見た。直径六尺位の大樹をくりぬき舟遊したらしい。之れを見て次は西湖につく。小さな湖面である。見ながら先を急ぎ、漸く上井出につき一迫する。宿の主人を呼んで亭情を話した処「萩は沢山にある」と言われ、大喜びして床に入った。早く夜が明ければと幾度も二隔の窓を開け、漸くあけた丘麓の天地一望千里、眺むるも萩らしいのが見当らない。潜かに自転車で跨って一里余り馳せ巡って宿に帰った。主人に「萩は無いようだが」と語ったところ、「お客さんの望みは大きい萩、此の地の萩は毎年馬の飼糧に刈取る草萩だという。これには愕然として、全く落胆してしまつた。その殺郡、玄関にタクシー乗る客がいたので、「何処に行かれるか」と問うと、「白糸の滝に」と言うから、「乃公も一緒に頼む」と言うと、「自転車がなくてはダメだ」と運転手が言う。「イヤ僕は乗らんじやない、道案内だ、自動車の後を追つて行くんだ」といって、笑いながらそのあとを追ひ白糸滝についた。

白糸の滝は富士山頂の雪が溶けて砂利の地層を瀘過し、山が崩れて池の如き滝壺となつたらしい。見上げる崖の玉砂利から千筋の白い細い滝が実に美観である。ベンチに腰を

下し、ふと眼を転ずると、竹やらえの中に木標があった。近寄って見ると、

「この奥に如何なる姫の在すらん。〇。〇。〇。白糸の滝」「源頼朝」何んと惜しい哉字が消えてしまつて下の句が解らない、と独り言を云うと、傍の客も「同じ宿でしたね」と言葉を交し始める。そこで私が萩の花を捜している事情を語ると大いに同情して、「萩は箱根の天城山に千古斧を知らぬこんな太い萩がある」という。これこそ天の助けと心を躍らせ、その客と駒止の桜まで自動車の後を追って一緒に到着。見れば直径五尺位の桜樹が約三百坪位に枝を垂れており、各枝を支援する松の丸木が見事に立ち列んで、大きな長屋門の前にあつた。流石は源頼朝が富士の捲狩の本陣と想像させられ、刺を通じ一と言でもよい、そのいわれを訊きたいと思つたが、魂は天城山に飛んでいるので、「お先に御免」と跨る愛車は下り坂、途中工藤祐経、曾我兄弟の墓に寄り、走る自転車は、大宮、続いて水力発電所を右に眺めながら御殿場に到着、此処には宿屋が数軒あるので、良い旅館を見つけて一泊する。

○翌朝は八時に出発した。外人村と言う杉山部落を抜けると、愈々登り坂で、自転車を押し転がしながら登る。高くなるにつれて眺がよい。富士が麓から見え実に壯観。「もう疲労した、休みたい」と思う処に、森永キャラメル台がある。一寸一ぶくと腰を下す。時計を見るとアレ午後二時だ。団飯を食べながら急ぎのぼる。心中で「箱根八里は馬でも越すが」の歌を思い出し、何ぞ怖れるものか四里登れば峠の筈と、勇気を出し、自転車を右手に、四方を眺めると、下の方に白雲が美しく見えたが動き出し、黒雲に化して、

だん々と身近に って来た。その時に轟音をたてて、強風が小雨を交え、自分の帽子を下から上にふきとぼしてしまった。之れは大変だ今更戻る事も出来ず、いくら行っても峠がない。夕暗に閉ざされる外人村から坂に掛って、以来人間とは逢わぬ。襲雨の為に自転車の輪に土が挟って転がせないから、路端の草の上を転がしている途たん、バタバタという轟音に、驚きに驚き持って居たハンドルを放したから、自転車が七、八尺熊笹の中に入り込んでしまった。見れば山鳥が二羽、遙か彼方に飛び去った。コン蓄生奴と怒ったが心臓に毒だと思った。自転車が如何としても上がらないので、下に引おろし、元の坂に出で、再び登り始める。峠にならぬ。困った。松の樹でもあれば、夜も明かすが、一面の熊笹ばかり。黒い雲に覆われた真の闇夜で、淋しさを感じつつ登ると、雲が去り、半月が出た。時計を見たら十一時半になる。マッチはあるが燃えるものはなし。冒険な事をしちまったと悔ゆるとき、フト見ると何か道端に棒がボンヤリと建てある。近寄ると朱塗の展望台である。ここに屋根があればと思いつく、頭をめぐらし燈火を発見し、「ア、人家だ、神の助け」と思いつつ、「今晚は旅のものですが」と救を求めると、逆に先方は怖がって、鍵を固める。庇でもよいからと言うと、「家の親爺は酒乱だから、そこいらに居ると打殺すぞ」と言って後は何とも言わない。でも「此処が峠だから」と言ったから幸に気分が明かなくなつた。勇気を出し、道が平らになつた所で自転車を跨ると、ボンヤリと黒い山に突当つた。るとトンネルである。真暗で自転車を右手に四五間吠ると、冷風強く、頭上には雨垂れ、気味の悪さ、怖しさに、一時立止まると、その闇の中に一つ眼が出た。山の怪獣かと思つたが、動かない。何怖れるものかと近寄ると、だん

だんに大きくなって、出口であった。ホットして、自分は健在、白い処が道路だ、ハンドルを固く握って、右に左にと曲折、宮の下につく。温泉に浸って、翌朝天城山の萩の話をすると、「飛んでもない。蜂箱がどうして持って往けるもんですか」と言われて、又々落胆、余儀なく絶望し、御殿場から丘麓の住野蜂場につくや、「何処に行ったかと心配していた」と語る。私が委しく一切を語ると、住野さんが涙を浮かべながら私の手を握りしめた。私は「何んとかして、萩花を見つけ、住野さんを喜ばせたい。勿論自分の生きる為でもあると言った。

○かくして苦心経営難の年を重ねる中に、昭和の時代となり、四年の春、これ迄種蜂売りと養蜂器具を売る岐阜の問屋が蜂を買い廻った。不思議に思っている内に支邦輸出と解る。忽ち大騒ぎ。一郡五、六円で買集めて、十円、十五円の値上り。後で聞いて見ると、北京では百円したとの事。之れが後げばと思つたが、五年に打切られた。住野さんが「猪（百円札の事）を見せようか」と懐から出して見せた彼の笑顔が良かったね……。

註 当時農林省統計、支邦へ種蜂輸出金額、貳百五十万円也でした。

○昭和六年の秋或る日の新聞で、函館連絡船が貨車そのままに呷り北海道に連結の記事を見る。住野さんは喜んで私に話をした。私も悦んで計画を建て、翌年（七年）北海道へ一緒に転飼して、蜂は貸切貨車、二人は急行列車で出発すると、途中青森県に入って車窓からナタネ花を発見し、帰るとき下車して調べたら無限にあり、丁度埼玉のレンゲ

終つて直ぐ此処に来る。此の地のナタネとトチを採密して渡道すると誠に順調、茲にこのコースを固めた。青森県養蜂の草分けでした。トチの時に堺氏が見え、僅か三人で開拓し、それこそ大豊収で忘れられぬ悦びでした。八甲田山から五台のトラックで青森駅に運び、列車に積込んだ時は、恰も凱旋將軍の様な気がした。途中酸ケ湯で下り、雪の中から花を咲かしている植物や、樋口五兵の標を見た。今でもそれが目の前に浮んでくる。

○住野さんが「清水さんが埼玉で越冬となつては淋しいから、乃公も埼玉に」と申されて幸手町江森氏方に來たのが九年で、互に楽しく、養蜂も豊かな経営となつて三年目、私が採蜜準備をしていると電報、「スミノビヨウキ、スクタノム」。驚いて馳けつければ布団に臥している。訊けば便所で倒れたとの事。奥さんは寝ずに看護。之を見て愚妻に交代で看護させ、「住野さんば少しも心配することはない。蜂は乃公が引き受けて採蜜して上げる」と慰め、それから二回収密し、「今夜は青森に出発する。早く丈夫になつて後から來なさい」と言うや、半身不随の体を半ば起し、涙ぐんで私と握手を交わす。(之れが最後となるつてしまつた。)

○古間木について住野氏の蜂は黒沢氏に委任し、自分は中塩氏方に移住した。約十日ほど経つと電報で、「スミノキトク」続いて「スミノシス」。私は直ちに「ジブンニカワツテ一サイタノム」と愚妻に返電した。数日を経て葬式の模様や、身元から二人來て、骨

を広島に持って帰られた事が解ったが、サテサテ蜂が困った。当時城山さんは浅草寿町で蜂蜜店を開き、生産と販売を兼っており、住野さんも深交、私も知友であるから、城山さんに住野の蜂を買受けて貰いたいが、住所が知れず困って、と思つてた処に、住野のおばさんと城山さんと二人が見えた。私と一札を交わし、直ぐに黒沢さんの宅に行つて、住野氏の蜂を検査し、再度私の処に二人して来て、「清水さん住野さんの蜂を買つて上げてくれ。私は自分の蜂が手一パイで引受けられぬ」と言つて辞退、押問答が始まるや、城山さんが「乃公に委せよ、其かわり両者に喜べるよう仲人をする。」住野さんは清水さんのお蔭で、埼玉四十五岳、今の蜂を採密すれば二十五岳は確実に採れる。此の蜂蜜を私が現金で買います。そうすれば住野さんの蜂代は出てしまふ」清水さんは住野さんに労力で奉仕、住野さんは清水さんに蜂代を半分位に私が見積り、之れで上げなさい」と示され相互に喜んで城山さんに委せ快諾し、住野のおばさんは神奈川県泰野の実家に帰られた。(因におばさんは泰野で知り合い、入籍しない人でした)

○昭和十一年の秋、彼岸が近づいたので、「住野氏にお経をあげるように」と私は北海道から金二十円を送った。そのお返しに小包として私の自宅に届いた。拡げると晒の反物の上に位牌の型の印刷の中に誓誠信士とある。「ア、住野さんの魂だ、戒名が住野さんソックリだ、之れは大切」と私は直ちに寺で拜んで貰い、自宅の仏壇に飾つて、先祖と共に茶香をあげており、蜜蜂転地となれば鞆に入れ、宿が定まれば新らしい箱の上に、住野氏の霊を安置。生けるものと思つて話しかけ、大切に各地を移住して居りました。

○歲月流れて十三年の秋、根室の原野小学校の前に、吾妻商店が離家を貸してくれたので、私はそこに移住し、住野さんを安置させ、天気と花の事を拝む毎に語っていた。或る日の事、部落民が大勢して店に來た。自分も暇だから店に出ると、舂や秤があり、雜穀検査と分った。其の人達が随分大きい蜂屋さんですね。十ヶ所もあるようだ。來ながら皆して数えたら、一ヶ所八十箱あつた。又明年も來たら、採蜜の時は手伝わしてくれ、是非頼むと話す。その時鼻ヒゲを生やしている人が、「乃公の叔父も蜂屋をしていたが死んだそうだ」と言うから、私が「貴方の叔父って誰ですか」と訊くと「内地です」という、「内地は何処です」と訊くと、「広島」と言う。「広島！では何んと言う人か」と問うと、「住野」と発言、「住野菊太郎さんか、それなら私の室に居ります、私についていらっしゃい、奥の室ですから」と申すと、其の男がキョトンと顔を変らせながら私の後についてくる。「これでしよう」と蜂箱の上の戒名を示すと、彼はお花茶香の供えてあるのに驚き、「如何なる訳か」と尋ねるので私が一切を話し、最後は埼玉で私の妻が死に水を取った事迄語ると、涙をポロポロ流しながら再び店の方に走り去って、皆さん來てくれ、叔父の供養だ」と忽ち酒肴、「私と住野氏との友情を告げられた。その人は雜穀検査員青木八月と言う名刺を私に出し、「來年から此の地に御出の際は電報下されば、蜂置場も宿も、又清水さんが手を出さなくも、人夫は幾人でも集めますから、そうして下さい。叔父の御恩返しをさせて下さい」と申され、これが動機で、自然と私の信用も高まる。靈魂不滅を深く感じました。

○間もなく宿の吾妻店に、一人娘がおむこさんを迎える様子。御祝儀前から種々な祝物が寄る。自分は何も買って上げられないから、画用紙を短冊と為して歌を書いて、金一封

と共に扇を拵げ、その上に乗せて出した。纏て賑やかに来賓、私は固辞していたが、遂に
番を引かれて往くや、何んと床柱の前に座らさせる。吾妻の主人が「項いた短冊の歌、
読めないから読んで聞かせよ」となった。お恥かしいですからと辞退したが仕方がない
「稚拙な作ですが婿さんが栄さん、花嫁さんがえんちゃん、店は吾が妻、

お目出たや 栄ある縁を神にうけ、

吉兆無窮 吾妻商店

「(一座大拍手)

以来私の蜂を見に来る者、飼って見たいという者あり中でも標茶の五十嵐忠衛氏は私に
協力して養蜂熱高く次々と友人を誘導現今の釧根地区養蜂の起因となったのでありますが
住野さんが岩見沢に帰国したのは前述の通りで恐らく北海道養の墓に蜂の草分であった筈
であります。亡住野氏も慰めたいが身元は戦災で不明。おぼさんの身元、泰野に神奈川
県養蜂組合、副会長相原信治氏あるにより同氏に依頼。搜索中だが生存不明、(四十六年
三月十八日現在、)住野氏は私より三十才上であった。おぼさんは生きて居れば八十二才
と三才と思う。

○人の一生は短かいもの。よくも自分は八十才まで生きられた。今からは余生である。余
技として好きな毛筆に遊び書でも画でも拙劣でもよいから是非愆しいとお仰せの方に喜
んで進呈、人を喜ばせる事が私自身の健康を増進する秘決と思つて居ります。生くる日
の限り、社会を愛し、友を求む。ご親交を希えます。

住野さん導いて下さい。

混

完

敬

白